

大豆栽培技術情報No. 1 「適期播種と雑草対策」

東部振興局 集落営農・農地活用班 0978-72-1141

令和元年7月

1. 排水対策

大豆は、主に水田の転作作物として栽培されています。開花期には水分を多く必要としますが、同時に**根の酸素要求量が多く、湿害を受けやすい作物**です。ほ場の**排水対策**をしっかりと行いましょう。ほ場の排水を良くするには、以下の方法があります。

- ①地表排水：ほ場周辺に**額縁明きよ**、ほ場内部に一定間隔で**明きよ**
- ②地下排水：**弾丸暗きよ**

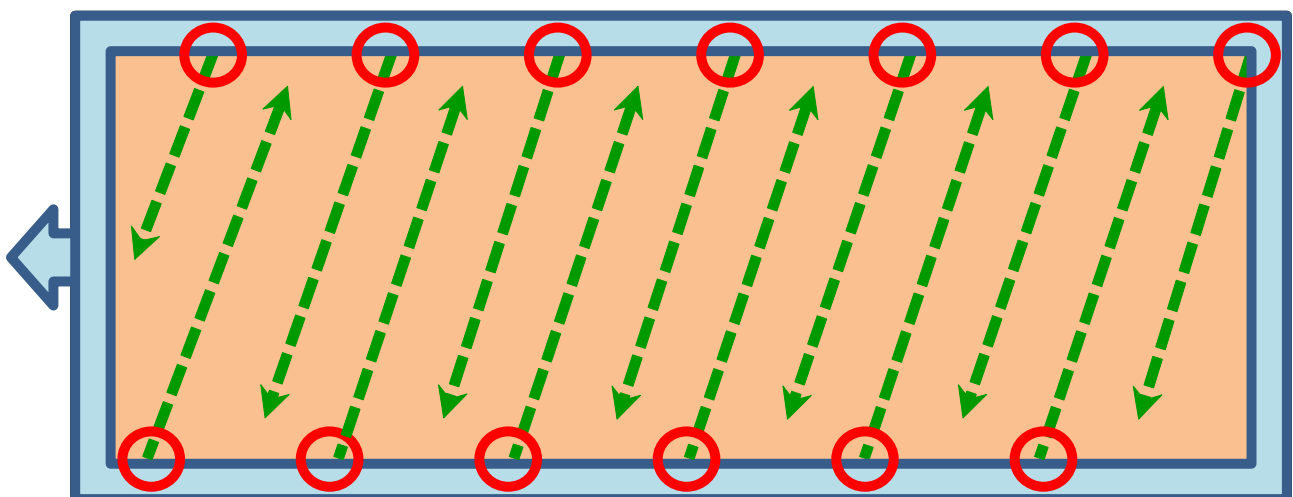
地表・地下のダブル排水で、『**播種適期に水がたまり播種できない**』を防ぎましょう！



額縁明きよ



弾丸暗きよ



額縁明きよと弾丸暗きよを接続して効果を高めましょう。弾丸暗きよで地下の水を誘導し、額縁明きよで地表・地下の水を集めて排水します。弾丸暗きよは間隔を狭めると効果は高く、一般的に**2～5m間隔**で施工します。

2. 土づくり

大豆・麦を連作していると、年々地力が落ちて来ます。**牛ふん堆肥 1～2 t /10a**を施用しましょう。

堆肥の施用により、地力の維持・向上と、土壌の通気性・透水性を確保できます。未熟堆肥の場合、雑草の種が残っています。**必ず、完熟したものを施用しましょう！**

大豆は石灰の吸収量が多いことから、根粒菌の増殖にも役立つ**ミネラルG 100～200 kg/10a**又は**苦土石灰 100～150kg/10a**を堆肥と一緒にすき込みましょう。

3. 播種直前耕起と耕起前除草剤

耕起した後に雨がが続くと、土が湿りすぎてほ場に入れず、晴れが続くと、土が乾きすぎるので、天気予報を注意しながら**播種直前に耕起**しましょう。

耕起後の雨と乾燥でクラスト（土の膜）ができると、発芽しにくくなる場合があります。クラストさせないためにも、排水対策が必要です。

また、雑草の多いほ場では、耕起前に除草剤を散布しましょう。

資材名	10a当たり薬量	希釈水量	使用上の注意
ラウンドアップ マックスロード	200～500ml	50～100L	耕起前に散布。

4. 種子消毒と元肥

播種前に種子に**キヒゲンR - 2フロアブル**を**20 ml/kg**塗布しましょう。苗立枯病、紫斑病、鳥害を防ぎます。

ネキリムシ・フタスジヒメハムシの被害が多い場合は、キヒゲンの代わりに**クルーザーMAXX 8 ml/kg**を塗布しましょう。

播種するときは初期生育を改善するため、元肥として豆化成**300**を**20 kg/10a** 施用しましょう（肥えたほ場では不要）。

5. 播種適期と播種量

播種適期は、7月1日～15日、標高150mでは6月下旬～7月上旬。**播種が遅れば遅れるほど、収量は下がります！**

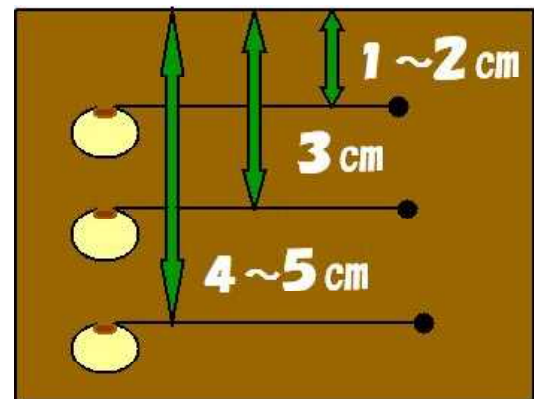
次のページを目安に状況に応じて、播種量を加減してください。

時期	条間 × 株間	播種量/10a
6月20日～6月30日	70×30cm、75×28cm	3.0kg
7月1日～15日（最適期）	70×27cm、75×25cm	3.5kg
7月16日～19日	70×21cm、75×20cm	4.5kg
7月20日～25日	70×16cm、75×15cm	6.0kg

6. 播種深度

土壌の状況と播種後の天候を予想して、深さと鎮圧を調節しましょう。

- ①基本は深さ3cmです。
- ②土壌が湿りやすく、雨が続くと思われる場合、深さ1～2cmで弱く鎮圧します。
- ③土壌が乾きやすく、晴天が続くと思われる場合、深さ4～5cmで強く鎮圧します。



7. 雑草防除（初期除草剤）

大豆播種後の発芽前、雑草発生前に散布しましょう！ 使用基準をよく読みましょう。

資材名	10aあたり薬量	希釈水量	使用上の注意
ラクサー乳剤	400～800ml	100L	播種直後に散布。よく整地して散布。
クリアターン乳剤	500～800ml	70～100L	

初期除草剤は、表面に処理層を作って雑草を抑えます。処理後、雨が続くと、処理層の濃度は薄まり、晴天が続くと雑草に吸収されにくくなるので、タイミングに注意します。

大豆は被覆力が強く、一度ほ場を覆うと、その後発生する雑草は生育できなくなります。初期除草剤と中耕・培土を行い、しっかりと抑草しましょう！



←ラクサー乳剤を播種直後に散布

←無処理区